

書 評：V. H. Heywood (ヘイウッド) 編集, 大澤雅彦監訳, 2005, 花の大百科辞典, A4判 355頁, ISBN4-254-17114-5, 朝倉書店, 東京, 価格 37,800円。

これは V. H. Heywood の Flowering Plants of the World の日本語訳で、とても楽しい本である。もとの本はオックスフォード大学出版会から初版が 1978 年に出ており、この本は 1993 年刊の第 2 版の訳である。この本は花の咲く植物 (= 被子植物) を、科を単位として解説したもので、イギリスを中心とするヨーロッパ各国の植物分類の専門家 40 名以上が分担執筆している。「はじめに」のあとに用語解説があり、それ以降は G. L. Stebbins の Flowering Plants—Evolution above the Species Level (1974 年刊) に依った分類システムにならって科が配列されている。

用語解説には植物の分類に用いられる外部形態を示す用語が多数収録されており、美しい図もたくさんあって大変理解しやすい。それに用語の日英対照表がついているのもうれしい。各科の記載には、分布と、形態の特徴、科内の分類、経済的利用などがあり、科ごとに世界地図上に分布が描かれ、科の構成をまとめたコラムと、葉や花、実、樹形などの特徴を描いた豊富な図があり、各頁のうちの一つか二つには彩色が施されていて、このすばらしい図が写真よりもはるかによい理解の助けとなり、この本のいちばんの特色といえるだろう。植物の分類システムという我が国ではいわゆるエングララー・システムが今でも一般的で、その他の並べ方だとの科がどの辺に出てくるかわかりにくいという難がある。朝日新聞社刊の週間百科『植物の世界』を新シリーズとして出す際には、A. Cronquist の The Evolution and Classification of Flowering Plants (1968 年刊) に依ったが、このクロンキストのシステムはその後の分子系統学からも大筋においては支持されており、これは大英断だったと思う。この本もクロンキスト・システムを踏襲したステビンスの本に依っており、エングララー・システムになれた人にはちょっと取っつきにくいかもしれないが、本の最後には付録として上記のステビンスの分類体系が載せてあり、分かりやすくなっている。そこには各科の属数と、種数、地理分布が 1 行に凝縮して表示してあって大変便利なものが日本語版のおまけになっている。

監訳の大澤雅彦氏が植物生態学の専門家であることはよくご存じだろうが、なぜ彼がこの訳本を出すに至ったのかについては後書きにちょっと触れられている。彼の言うとおり、実際、植物の世界を解説した本は国内外にいくつかあるのだが、いずれもがあまりにも専門的すぎたり、あるいは限られた植物群しか扱っていなくて、すべては網羅されていなかったり、逆に歴大であったり、一冊の本で世

界中の植物すべてが分かりやすく解説されているという本はなかなか無い。大澤氏はこの本 (原著) に出会って我が意を得たりと大いに気に入り、以後、知人や学生などに本をプレゼントしたりしてきたとのことである。その過程で、これが日本語であったらと思うことが何十回となくあったことだろう。大澤氏は高校生の頃から植物に大いに親しみ、植物相調査なども手がけ、実に良く植物を知っている方である。専門こそ植物生態学ではあるが氏の植物分類の素養は私など足元にも及ばない程である。このように、分類学の外にあって分類学を良く理解している方が監訳にたずさわったことがこの本の成功の秘訣であったに違いない。翻訳を担当した方々は大澤氏が千葉大学在職時の研究室のメンバーと千葉県立中央博物館の植物関係分野の方が中心で、彼らも生態学を専門としている方がほとんどなので、専門外の分類学の用語が大半を占める形態の特徴や科内の分類の部分の翻訳にはかなり苦勞した方もいたことと思う。彼らの訳がそのまま本になってしまったらこの部分はきっと分類学の専門の人から様々な問題を指摘されることになったのではないかと想像する。これがそうならなかったのは、その翻訳を、分類学を専門とする福島大学の黒沢高秀氏と、大澤氏の新しい職場である東京大学の新領域創成科学研究科の福田健二氏が「編訳」として加わり、恐らく全般的に訳を見直してくれたからであろう。

大澤氏の熱意と共同翻訳者の大きな助けがこのすばらしい訳本に結晶したとと思っているのだが、ただ一つ大澤氏が残念に思っていることがあるのではないかと想像するのはこの本の値段の高さである。私が原著を手に入れたのは 20 年以上前で確かな値段はもちろん覚えていないのだが、大型で豪華本であるにもかかわらず「安い」と感じたのは確かなので、恐らく数千円の値段ではなかったかと思う。良い本を手に入りやすい価格で長い期間にわたって出す、というヨーロッパの出版のコンセプトがよく分かる価格であった。発行部数と価格は逆相関で、本を出すに当たっては一番悩ましいところだが、バブル期とは全く逆の経済環境にある現在、植物は好きなんだけれど・・・という方達には手の出しにくい価格設定になってしまったことは惜しまれる。リビングの書架に置いておき、ソファに座ってお茶あるいはブランデーでも手にしながらこの本の頁をめくる、そういった読み方が似つかわしい本である。

(鈴木三男)